

淡路島の隠された魅力を伝える提案

—淡路B級スポット観光案内所—

1160017 上田 悠貴

指導教員：渡辺 菊眞

高知工科大学 システム工学群 建築・都市デザイン専攻

1. 背景と目的

「淡路島」と聞き、連想されるスポットといえど何が思い浮かぶだろうか。恐らく明石海峡大橋や淡路サービスエリア、淡路夢舞台といったものが挙げられると思う。淡路島で生まれ育った私でさえも、似た回答になるだろう。しかし、そんな淡路島には、世間的にあまり知られていないが、おもしろいB級スポットが幾つも存在する。私はその事実を、ある企業が企画した「島の魅力を伝える人になる研修」に参加した際知ることになった。その研修を経て、これらのB級スポットを、より多くの人に知ってほしい、足を運んでほしいと思うようになった。そして、知名度ある観光地の陰に隠れた、B級スポットにもっと光をあてたいと感じるようになった。

淡路島中に点在するB級スポットを多くの人に知ってもらうためには、そのスポットを広報する場所が必要となってくる。広報といっても、ホームページやパンフレットのような一般的に用いられる方法では、魅力の伝達力に欠けるように思う。B級スポットが持つ魅力を建築空間の中で紹介することで、魅力が体感として深く味わえるのではないかと考えた。そこで、体感型のB級スポット観光案内所を提案する。

2. 敷地

2-1. 敷地選定の根拠

まず、提案する観光案内所の存在を可能な限り多くの人に知ってもらう必要がある。そのことを踏まえ、淡路サービスエリアに敷地を選定した。淡路島の玄関的な存在である淡路サービスエリアは、淡路島の観光や本州と四国の横断の際に休憩場所として多くの人々が利用している(兵庫県 道の駅ランキング一位の集客を誇る)。また、淡路島民も利用するため、かなりの賑わいがある。さらに、明石海峡大橋の展望や商業施設の充実により、長

時間滞在する人も多い。そういった淡路サービスエリアの特質が、提案する建築の認知に、おおきなメリットがあると期待される。



図1.対象敷地位置図^{*1} 図2.対象敷地位置図^{*2}

2-2. 提案物の在り方

計画敷地は淡路サービスエリアの侵入口付近にある中央分離帯とした。この敷地は幅が1.6~2.5m、奥行き約85mであり、きわめて特殊な形状をしている。集客数を目的として淡路サービスエリアを選定敷地としているが、新たに建築を建てる敷地はほぼ残されていない。さらに、B級スポットを扱う建築であるということから、既存の商業施設とは疎遠な関係性を強いられ、利用用途に乏しい特異な敷地を選ばざるを得ないのはむしろ自然であろう。除け者扱いされる形で選定せざるを得ない中央分離帯は、逆にサービスエリアの利用者の目に数多く触れる敷地でもある。計画地として中央分離帯という場が最適であるといえる。



図3.計画敷地の配置図



図4.計画地の現状

3. B級スポットの選定

今回選定したB級スポットは、魅力的なものでありながら、その場所・物に関しての広報手段がないもの、広報しているがあまり結果が出ていないものとしている。

以下に具体的に選定したものを紹介する。

*1 地図・空中写真閲覧サービス<<http://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1>> (取得日 1月25日)

*2 template: 画像地図淡路島<https://ja.wikipedia.org/wiki/Template:画像地図_淡路島> (所得日 1月24日)

3-1. 淡路瓦



淡路瓦は日本三大瓦の1つであり、きわめて有名な特産物である。ところが、現在では淡路瓦の需要が大幅に減少している。一説によると、ある家で屋根が崩れる事故があり、淡路瓦の重量の仕業だという噂が流れ、需要が急激に下がったそうである。そのため、瓦業では、屋根としての収入の少なさを補うために、お皿のような実用品として加工して売ることになれば、瓦割り体験を実施し収益を得ようとしているのが現状である。

3-2. しづかホール



淡路市志筑新島^{にいじま}に位置し、演奏会や成人式の会場として使用される施設である。大きめのホールで、リハーサル室や会議室が完備されている。演奏会に利用可能なホールには800名ほどの収容人数が確保され、多目的にわたり淡路島民が頻繁に利用している。その外観は、オーストラリアのオペラハウスをモチーフに設計されたものには見えないが、公式的には、あくまで、「舞を舞っているときの扇」をイメージしているらしい。

3-3. 玉葱

淡路島の特産品として玉葱はかなり有名である。「淡路島の玉葱」というブランド力を背景として、とてもユニークな物が存在している。

3-3-1. うずの丘大鳴門記念館



南あわじ市福良内^{ふり}に位置する道の駅である。四国から淡路島や本州への道中の休憩場所として利用される一方で、トリックアート展やうずしお科学館でシアター上映されており、イベント開催の施設としても利用されている。その機能とは関係がないのに、施設内は玉葱色に染まっており、玉葱の UFO キャッチャーや玉葱ヘアーにしている店員さんが働き、さらに玉葱や淡路オニオンバーガーも販売されている。

3-3-2. オニオンタワー



南あわじ市松帆西路に位置する西路公園に建っている電光掲示板である。南あわじ市は玉葱と瓦の名産地であり、西路公園内には、瓦のモニュメントも存在する。タワーの下部が玉葱の形をし、10m 近くあ

るそれは、何ともいえない光景を生んでいる。

3-3-2. たまねぎの塔



南あわじ市八木養宜上^{ようぎかみ}にある淡路ファームパークイングランドの丘の正面に立っている石像である。イングランドの丘は利用者の多い施設であり終日賑わいがある中で、どういった理由で作られたのか分からないこの像は、駐車場から離れた位置にあることもあり、忘れ去られたかのようにひっそりと立っている。

3-4. 五斗長ウォーキングミュージアム



淡路市黒谷五斗長に位置し、「歩く美術館」というテーマで、森の中を歩きながら、作品を通して自然を感じ、人が歩いてきたからこそこの「今」を感じてもらうことを目的に、森の中にアート作品を配置した美術館である。NPO 法人淡路アートセンターが主体となり、地元住民と協力しながら行われているプロジェクトで、2013 年から始動し、現在では、いくつかのアート作品が展示されている。多種多様な芸術家の作品を展示しており、見応えのある美術館となっている。

3-5. 世界平和大観音像



淡路市釜口にある高さ 100m ほどの大きな観音像である。平和観音寺に建てられた観音像は大阪のとある企業の創業者が、出身地である淡路に、観光客の誘致を目的として建設した物で、観音像の内部空間には、展望台やレストラン、創業者のコレクションが置かれた博物館などがあった。現在では、創業者が亡くなられたことで、管理者が不在となり、廃墟となっているのが実状で、存続させるか否かが問題となっている。100m の高さが持つ圧倒的存在感に加え、立ち入りが禁止され、遠くから眺めるだけしかできない距離感が逆に、世界平和大観音像の魅力となっている。

4. 設計

設計の工程として、外殻と内部展示の2段階にわたる設計を考える。観光案内所として建物の外殻だけを先に設計し、その空間の中に、それぞれに見合った展示方法が組み込まれる構成にする。外殻の建築は常設、内部展示は変更可能な仮設とする。内部

展示で変更可能にすることで、B級スポットの追加展示を可能にする。

4-1. 外殻建築の計画

4-1-1. 方針

B級スポットの広報効果を高める建築であるには、何よりも集客力が必要となる。サービスエリアの利用者が、この建築に強い興味を持ってもらえる外観となるように設計する。また、出入口は1箇所ずつのみとし、入口から出口まで一筆の順路で観覧する形とする。

4-1-2. 標識として機能するRC造立面

サービスエリアの進入道路付近には、速度制限や駐車場の状況など、いくつかの標識が設置されている。進入してきた車のドライバーに対して、必要な情報を提供するためである。中央分離帯に建築物を建てる際、邪魔だからといって安易に標識を無くすことは出来ない。そのことから、提案する観光案内所の侵入入口側の立面には必要な標識を漏れなく設置し、情報提供機能を持たせる。

4-1-3. 集客として機能する木造立面

進入道路側立面では、RC壁が長さ85mもそびえ立つインパクトがあるものの、利用者にとってそれは、あくまで道路標識として存在し、それ以上に意味を持たない。そういった意識の中で、進入してきた車は逆側の立面を見る。逆側立面は木造壁と連続する瓦屋根で構成される。先ほどまで標識であったものが、建築物としての表情を見せる。これによりサービスエリア利用者の心を驚掴みにする。



図5.立面構成のダイアグラム

4-1-4. 斜壁による視線操作

計画する敷地は、幅1.6m~2.5mで、奥行きが85mの特異な敷地で、奥行きは深いものの、幅は、極端に狭小である。そうした中で標識に向けパースの効いた斜壁を設けることで、視線が標識の方へ吸い寄せられる効果を与えることに加え、内部空間の容積を稼ぐ。

4-2. 内部展示の計画

4-2-1. 外殻建築の計画が生む、内部空間のポテンシャル

外部環境に応答した外殻は、その内部に魅力ある空間をつくり出す。幅を十分に確保できない敷地で且つ、標識として機能する立面を獲得するために生まれた斜壁は、内部空間に羨のある空間、そして陰影に富む魅力的な空間を生み出す。また、人を惹き付けるための設計である、標識として存在するRC造立面と、建築物としての表情を見せる木造立面の混構造は、RC造と木造とが向き合い、両者が刺激しあう、独特な内部空間をつくり出す。さらに、出入口が1つずつしかない、一筆順路の建築は、85mという長大な距離を先へ先へと進ませる空間効果を生む。

4-2-2. 方針

先に設計した外殻空間に、選定したB級スポットの魅力が体感できる展示をする。その際、先に示した内部空間の魅力を最大限に活かすような、展示となるよう留意する。

4-2-3. 内部展示の構成

内部展示の配置は以下の図のように行った。一筆順路の細長い建築はその空間ゆえの拘束力を持ち、観覧者が、それぞれのB級スポット展示をどういった流れで観覧するかが肝要となる。一筆書きの展示空間においては、観覧する順番が決まってしまう、入口付近の「しづかホール」や「玉葱」関連展示は、最終的に印象が薄れてしまう。このため、これらはあくまで、その存在を認知させることを目的とし、写真やオブジェを【観覧】することに止める。その一方で、出口に近い「五斗長」や「観音像」は経路後半であり、クライマックスとしての印象をより高めるために【体感】型の展示方式をとる。

全体としては、メリハリの効いた展示となり、高揚感の高いものとなる。その感覚が、この体験を数回繰り返したい気分を誘い、【観覧】型の展示を繰り返し見ることでその印象を補強できる。

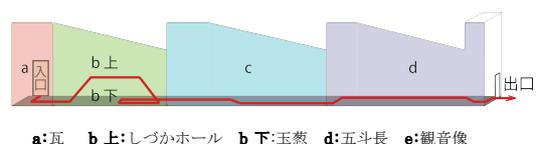


図6.内部展示の順路図

4-2-4. 淡路瓦(展示 a)

淡路瓦は、当観光案内所の屋根材として徹底的に使用し、展示を兼ねる。瓦は屋根に葺かれた姿が、一番活きたと考えたためである。その上で、現在の瓦業の実状や、経営のための創意工夫などを入口付近にて展示する。

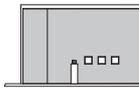


図 7.展示の風景図

4-2-5. しづかホール(展示 b)

「しづかホール」は、オペラハウスをモチーフにしたオマージュ建築であるというテーマで展示する。オマージュ建築というものは、本家に比べ規模の小ささや敷地の違いから、どうしても醜くなってしまふことが現実である。展示方法では、「醜さ→見にくさ」とし、2m上がった場所に展示スペースを置いたことで、せり出しの壁が途中から姿を表し、説明や写真が見えづらくなるといった方法をとる。

4-2-6. うずの丘大鳴門記念館・オニオンタワー・たまねぎの塔(展示 c)

「大鳴門記念館」、「オニオンタワー」、「たまねぎの塔」は、たまねぎブースとして同じ空間に展示する。これらはそれぞれに、素直に不細工でダサイ。そこで、「しづかホール」同様、「醜さ→見にくさ」として展示する。しかし、「しづかホール」は、頻繁に利用されている重要な施設であることを考慮すると、玉葱関連のモニュメントの方が醜さの上で軍配があがる。そこで、「しづかホール」の展示スペース下の、単管が組まれた空間を扱い、単管をまたぎながら、見にくさ満点で観覧する。



図 8.展示の風景図

4-2-7. 五斗長ウォーキングミュージアム(展示 d)

五斗長ウォーキングミュージアムのコンセプトは「歩く美術館」とし、作品を通して自然を感じる場所である。ここでは、その部分を抽出して、展示する。展示方法として、中央に建

つ壁に作品のシルエットをくり抜き、その穴から両側の異質な壁(RCと木造)を見ることができるよう計画とする。「作品を通して背景の建築を感じる」と、「作品を通して背景の自然を感じる」に通じると考えた。

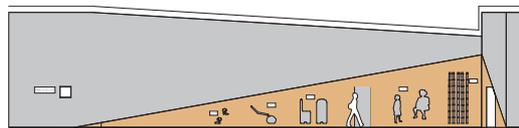


図 9.展示の風景の図

4-2-8. 世界平和大観音像(展示 e)

世界平和大観音像の魅力は、100mもある高さで、進入禁止とされ、遠くから眺めるだけの存在となった現状にあると考える。そのために、展示方法としては、覗き穴から遠くにある6mほどの観音像を眺める形をとり、高さを錯覚させるために、写真などで観音像の姿を事前に情報として与えつつ、覗き穴からは、せり出した壁により、観音像の頂上まで見えないように設計する。また、覗き穴を縦長に開けることで、頂上まで見ようとする利用者は、自然と視線が下がり、観音像の高さを実際より高く見せることができる。

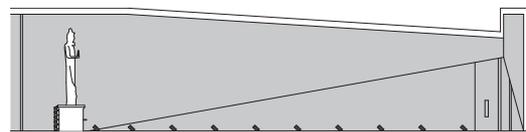


図 10.展示の風景図

5. まとめ

1. 除け者扱いされる形で選定した中央分離帯という細長の特異な敷地は結果的に、最も目に触れる場であり、標識としての立面を目にした後に、建築物としてあらわれる立面は、サービスエリア利用者の興味を強く刺激することで、高い集客力を持たせることができた。

2. また、外殻計画で得られた内部空間の魅力をそれぞれの展示方法に見合った形で活用し、体感型内部展示として魅力的な空間をつくり出すことが出来た。この結果、B級スポットの広報に加え、実際に見てみたいという意欲を沸き立たせることが出来たのではないだろうか。